

オモチャ屋さん 2



設定

男をラバースーツに包まれた言いなりのオモチャに変えてしまうオモチャ屋のお話です。オモチャにされた人間の動きを停止させるチップが出てきたりと、少しSF要素もあります。

ノンケ消防士角田晃を主人公として物語を展開しています。

登場人物

角田 晃(つのだ あきら) 26 歳 消防士(歴 4 年目)

真面目で責任感が強い。理不尽なことには上司であっても意見する。上司城田の依頼で、オモチャ屋でラバースーツに包まれたオモチャに調教された。製造番号 S-19。

城田 雄三(しろた ゆうぞう) 50 歳 消防士(歴 25 年)

「怒鳴るのは愛情」「部下は従って当然」という価値観をもつ。晃に威圧的な言動や人格否定を繰り返していたが、一方で歪んだ愛を持っていた。

高橋 直輝(たかはし なおき) 35 歳 消防士(歴 13 年)

仕事はでき、後輩からの信頼も厚いが、黒田に正面から逆らうことはせず、衝突を避けている。

城田 彩(しろた あや) 25 歳

城田の娘。晃とのお見合いを希望していた。

服従

箱のふたが開くと、まず光が落ちてきた。長いあいだ遮断されていた白が、内側に溜まっていた黒を一気に押し流す。空気が動き、わずかに遅れて音が戻ってくる。

身体はまだ、箱の形を覚えていた。狭さに合わせて固まったまま、関節が素直に言うことをきかない。

新たな主人の手によって電源が入る。

内側に眠っていた流れが、順番に目を覚ましていく。まずは心が。次に、感覚。遅れて、動作の許可が下りる。

腕がゆっくりと持ち上がる。自分の意思より、少しだけ早い。脚が床を探り、決められた姿勢で止まる。ぎこちなさはあるが、誤りはない。想定通りの動きだ。

箱の中では曖昧だった時間が、再び刻まれ始める。

粗相のないように誠心誠意の挨拶をする。その土下座している頭に降り注ぐ笑い声、、どこか聞き覚えのある声だった。顔を上げると、そこにはあのいつも晁をなじってくる城田がいた。最悪だ、、、それが最初の正直な思いだった。

「角田、、、いや職場以外では S-19 だったな。どうだ、俺のせいでそんなものを着せられて、言いなりのオモチャに変えられた気分は？」

「、、、、。」

「答えろよ、命令だぞ、、。」

「、、、私は、、オモチャです、、ご主人様に、、仕えることは、、私の喜びで

す、。。」

（く、、、よりもよって、、、城田が、、主人だなんて、、、こいつが、、俺をこんな姿にしたなんて、、、、。）

くやしさがこみ上げるが、それを表に出すことすらできない晃はふるえながら必死にオモチャになりきっている。

「そうだよな、俺のオモチャになれてうれしいよな。こんなに股間を硬くして、淫乱になったなあお前も。今後ずっとお前を可愛がってやるよ、、、、。」

城田は晃の股間をラバー越しにもみながら晃を追い詰めていく。

「ほら、ファスナーをあけて、お前の一物を披露してみろ。手は頭の後ろで組んで腰を突き出せ。」

「はい、、、ご主人様。」

晃は言われた通りの姿勢となり自身のペニスを城田に差し出す。

「ははは、、勃起したペニスを上司に見られて恥ずかしくないのか？そんなにびくつかせ、汁たらせて、そんなに嬉しいのか？お前いつも俺になじられて本当はうれしかったんだろ？」

城田は晃のペニスにローションを垂らすとゆっくりとしごいていく。

「うう、、あ、、う、、あ、うう、あ、、、あ、、、うう、、。」

「今後お前には射精の権利はもちろん、オナニーの権利さえない。すべて俺の命令で行うんだ、、、。あれだけ口答えしていた勢いはどうした、、口答えしてみろよ。」

「うう、、ああ、、うう、、あ、、私は、、ご主人様の、、、オモチャです、、ご命令に、、従います、、うう、、。」

城田は晃の乳首も解放するとそのピアスを転がしさらに刺激を与えていく。

「ぐ、、うう、あ、あ、、あ、、う、、あ、うう、、。」

「俺のオーダー通り、乳首にこんなものまでつけられて、まさに俺の所有物といった感じだな、はははは。あのオモチャ屋は高いだけあって、やっぱりいい仕事をする。依頼した甲斐があったよ。お前をこんな変態に作り変えてくれるなんて、はははは。さあ、お前ばかり感じてないで、お前の主人にお願いして、、奉仕するんだ、、、。」

晃は複雑な表情をうかべながら城田の前で土下座をする。

「ご主人様、、どうか S-19 にご主人様のちんぽをご奉仕させてください、、お願いします、、。」

心はすでに死んだと思っていた、、感じる悔しさが恥ずかしさがまだ心があることを証明していた、、。